

『デカルトの密室』例会レジュメ

1. 著者紹介

瀬名秀明…東北大学大学院在学中に『パラサイト・イヴ』でデビュー。元東北大学機械系特任教授。著書に『パラサイト・イヴ』（日本ホラー大賞受賞）、『BRAIN VALLEY』（日本SF大賞受賞）、『第九の日』、『八月の博物館』、その他に科学系のノンフィクションが多数。

2. 前回の密室～メンツェルのチェスプレイヤー～

作中で度々触れられる、玲奈とケンイチが遭遇した事件。
人間を殺害することで自由を手に入れたとするロボットが登場。
身体知、ロボットの自由が題材。

3. プロローグ クイーンをビショップの3へ

- ・アイザック・アシモフ「キャル」…短編集『ゴールドー黄金』所収。小説を書くことに取りつかれたロボットの話。アシモフのロボットは創作にのめりこむ傾向にあるらしい。
- ・「2001年宇宙の旅」…アーサー・C・クラークが小説をスタンリー・キューブリックが映画の脚本を書いた映画。説明（ナレーション）を全てすっ飛ばしてしまったので難解な作品で有名。長い間誰も気づかなかったチェスのミスにケンイチは一瞬で気付く。

4. 第一部 機械の密室

- ・チューリング・テスト…機械が思考できるのか試すテスト。ちなみに、2014年のロンドン大会においてロシアのAIが初めて合格した。
- ・中国語の部屋…チューリングテストに対するサールの反論。←量の問題。やりとりができていた時点で知能が働いているとっていいのではないか？
- ・言語と立場…日本語と英語の視点の違い。←日本で叙述トリックがウケる理由？なぜ、ケンイチはフランシーヌを射殺したのか。

5. 第二部 脳の密室

- ・フレーム問題…ある行動をするためにどのような情報を取捨選択しなくてはならないのが実は非常に難しいという難問。→ミステリにもフレーム問題がある？
- ・デカルト劇場…カルテジアン劇場とも。外部に経験を統合する脳の部位がある、とい

う意識に関する仮説を批判したもの。→脳は局所的ではなく、全体的に働いて意識を働かせる。意識の形成には若干の空間的・時間的ひろがりがある。

- ・フランシス・プログラム…ネット世界への自我の拡散。脳の密室からの解放？
- ・機械の中の幽霊…「攻殻機動隊」にも影響を与えたケストラーの著書。人間を部分に還元していったときにまだ残る「何か」が人間を人間たらしめているゴーストなのではないか。
- ・モラルの密室…密室の中に閉じ込められていても、そこが密室だと思わなければ、その人は自由になるのか？
- ・ロボットによる殺人…『鋼鉄都市』、『硝子のハンマー』

6. 第三部 宇宙の密室

- ・最後の密室…「世界」。この密室から出ることは出来ないが、一体化することは出来る。梵我一如の境地。
- ・人間原理…宇宙の構造の理由を人間の存在に求める考え方。宇宙が人間に適しているのは、そうでなければ人間は宇宙を観測しえないから、という理論による。
- ・物語…われわれは他人や世界を、物語を介して理解する。ケンイチが小説を書くのはこのメタファーでもあろう。

7. 探偵の密室～エピローグにかえて～

- ・後期クイーン問題…法月綸太郎が提唱し、笠井潔が名付けた、探偵の提示した解決が本当に真の解決か作中では証明できないという問題。
- ・本作の叙述…「ぼく」と「ぼく」

8. まとめ